

高橋龜吉著『株式會社亡國論』を讀む

箭 内 正 容

本書者が本書の序文に斷つてゐる様に、本書には春陽堂から出版された「日本資本主義の合理化」に於て論述せられたと同様の問題が基底として取扱はれてゐる。即ち資本主義社會制度の統制する所謂株式會社、銀行なるものが、如何に腐敗墮落してゐるか、及びその對策は如何と著者の改革論が叫ばれてゐる。(尤も本書にはそれに若干の必要なる加筆削除が本書の目的によりよく添ふ爲第一編第一章になされてゐるが)而して又著者は著者の最も得意とする實證的研究を發揮して、第二編に於て破綻銀行、株式會社各個についてその原因、過程等々の検討を怠つてはゐない。

第一編に於いては

一、株式會社の頽廢と我が經濟界の行詰の章下に、株式會社破綻の一般的原因は那邊に存するかを抽出し批判してゐる。又株價の低落を阻止する爲めの資本主義的方法、而してその機關たる現在の株式取引所制度の內在的缺陷を指摘し、所謂惡重役なるものが如何に多くこの缺陷を利用して、不正欺瞞を續けてゐるかを暴露してゐる。

二、我が會社企業紊亂の實情と其の對策の方向の章下に、株式會社腐敗墮落の諸斷面をば縱横の各側面から觀察してゐる。一體我が國に於ける會社經營は、その場主義的機構の經營狀態である。然らば何故に、かかる經營

方法をとらねばならないか、その根因は何か？。更らに著者は解決のメスをば政府の政策を掘り下けることによつて充分その眞價を揮はんとしてゐる。

三、株式會社の財政的亂脈と其の對策、

四、蛸配當橫行の實際と其の對策、

氏は蛸配の事業界橫行の原因を左の三點から探つてゐる。

イ、重役の立場から、

ロ、株主の立場から、

ハ、對外關係から、

彼等重役が慣用する蛸配當、併もそれはあらゆる場合に於て、重役その他責任者が自殺的行爲であることを知りながらもあへて行ひ續けてゐるのであるが、何故該配當を行ふのか、現代社會現象に於けるその原因を氏は可成根本的に筆述されてゐる。即ち、

1. 資本の喰潰しの爲め愈々進退谷まる窮地に陥る迄に

は、可なりの長期間を要すること。2. 従つてその間には或は好景氣の再來によつて、或は又他の僥倖によつて、之を何んとか糊塗し了り得ることを期待するか、3. 又は萬一の場合には政府の救済に縋り、損失を國民に轉嫁する運動をなし、4. 乃至は外部に破綻の曝露する以前に、自分は責任の地位を退いて之を他の責任に轉嫁することを考へるからだ。

この一章は吾々讀者の注意と興味とを喚起するであらうと思はれる。

五、合同合併に由る株式會社の腐蝕、

株式會社の腐敗重役の不正は又、合併と言ふ方法に由つて屢々行はれる。就中最近の日本の如く、政府が「産業合理化」の名に由り、事業統制のためと言ふ口實で旺んに合併を勸奨しつゝある場合に於て斯様な「不正」は一層容易に行はれ得るものである。と言つてゐる。そして又ボロ銀行がその破綻繚縫策として比較的良質の銀行

との合併、又はボロ會社合併、ボロ銀行同志の合同等の内幕を曝露してゐる。

六、重役腐敗の實相と其の對策、

著者はこの章に於て、資本主義生産方法の現段階に於て所謂重役改造の必要を力説してゐる。然し乍ら氏の改造論なるものは幾何の効果を握り獲ることが出來やうか？ 讀者は疑はざるを得ないだらう。

第二編に於ては破綻會社各個別的研究を二十一の會社について、その主要原因別として批判され掘り下げられてゐる。即ち、

一、主として重役の不正に基く破綻會社。これに屬するものには東京乗合自動車會社、東洋モスリン會社、武藏野鐵道會社等、

二、事業の無謀擴張と蛸配に主因する破綻會社、川崎造船所、東京電燈、樺太工業。

三、放漫經營と蛸配に主因する破綻會社、日本セメン

ト、鹽水港製糖、日本製粉、大正製糖

四、投資對象の失敗と蛸配に主因するもの

五、放漫經營による銀行破綻の事例

東洋拓殖會社、東京渡邊銀行、臺銀、十五銀行

六、大風呂敷經營に由る破綻會社の例

八千代生命、星製藥等

以上ここまで一貫して素讀乍ら讀んで、はたしてより多く學び得たものは何か、株式會社亡國論そのものではなくして×××××的著者それ自身のイデオロギーの問題ではなからうか。

吾々は本書に於て僅かに概念的ながら現代の段階に於ける資本主義社會の内幕の一部分の矛盾をうかがふことが出来るだらう。然しその内在的矛盾を糊塗せんとして×××××高橋龜吉氏は必死の努力をなしてゐる。それを知らんが爲めにも本書は一助とはなり得る。

たゞそれだけの價值を持つのみと思はれない。

ブルジョアジの代辯者たる社會民主々義者の役割が如何に眞實の被壓迫階級にとつて強敵であるかはつきりと學ばねばならぬからだ。

氏は言ふ、いかにも今日の我が經濟行詰りの原因中には如何に優秀な重役と雖も、之をどうすることも出来な分子がある。だが今日に於ても重役さへ有能であれば且つ誠意をもつてすれば尙ほ事業を有利に經營し得る餘地は依然少からず殘されてゐる、云云と。

所謂この優秀な重役なるものであつてどうすることも

出来ない分子こそ資本主義社會の内在的矛盾が、極度に尖鋭化して全面的に發展した現代世界經濟恐慌のよつて基づく資本主義制度そのものではなからうか。

而して誠意をもつて何をせよと言ふのだらうか、又何が事業を有利に導くと言ふのか？ それはプロレタリアートの搾取以前の何物でもないだらう。

要するにブルジョアの代辯、改良主義者によつて實證的に現代の内幕を一寸のぞかせられたに過ぎなかつたと思ふ。(萬里閣發行三九五頁一圓五十錢)